



あれから、いま、 そしてこれから…

編集委員会より「生存確認の一文を」とのご要請をいただき、「ひろば」への飛び入りを決意しました。場違いな登場をお許し下さい。

◆あれから——

2020年8月に協会事務局を退所して2年半の歳月が流れました。早すぎる連れ合いの彼岸への旅立ち、時間に追われる協会業務からの解放、そこにコロナ禍という余りにも変わりすぎる日常生活にしばしのためらいと葛藤の日々が続きました。「これもまた、人生！」と我が身に言い聞かせながら、飼い猫とジャレ、草花の手入れ、連れ合いが収集した大量のCDを流しながら読書三昧に耽る、それはそれで贅沢な時間を過しておりました。しかしそんな日は長くは続かず、地域の市民活動への誘いラッシュ！いずれの組織もそのすさまじい高齢化の実態を知らされると、自らの年齢も忘れ断る勇気が癒えます。悩んだ末、不義理への非難覚悟で、新たに加わる市民運動を「九条の会」と「対話的研究会」に絞りました。どちらも入会とともに世話人という役目をつけられ、多忙な日々のはじまりです。

毎月送っていただいている「法と民主主義」、特集テーマに共鳴しながら、「富樫さん、がんばってる！」と、すっかり一愛読者となっています。私が関係した33年間の「法民」に新しい「法民」が加わり、書庫の「法民コーナー」は輝いています。

◆いま——

所沢市内にいくつかある「九条の会」、私が参加しているのは「マスコミ・文化九条の会 所沢」(*)です。マスコミ、出版、印刷関係で働いていた方々が中心になっていて、カラー刷りの会報が発行されています。この会報に、協会でお世話になった諸先生方に登壇していただいています。廣渡清吾先生には巻頭論文に市民連合の活動を、また定時総会の記念講演も。清水雅彦先生にはコロナで休会していた3年ぶりの「憲法カフェ」の講師に。大江京子先生には75周年を迎えた憲法集会でのご挨拶の掲載を。そしてつい先日、今年の「憲法カフェ」の講師には、「軍事大増税のカラクリを解明する」として、浦野広明先生にお引き受けいただきました。いずれも大変好評で、ご無理なお願いをご快諾いただいた先生方に感謝しています。

もう一つは、埼玉大学名誉教授の暉峻淑子先生

より協会に在籍時代からお誘いいただいていた東京の練馬を中心に十数年続いている「対話的研究会」への参加です。ゆるやかな約束ごとのなかに「必ず発言！」があり、参加者全員の意見表明が厳守されています。参加者は時には報告者となります。テーマは自由。私にもその役割がまわって来ました。一度目は、映画「日独裁判官物語」を素材に、裁判官の市民的自由に視点をおいて、日本の司法がかかえる問題について報告しました。ディスカッションを通じて、様々な市民運動の経験を持っている人たちにとっても、司法がとても遠い存在であり、「最高裁裁判官国民審査」にもほとんど関心がなかったことにおどろかされました。昨年の暮れには、安倍元総理の銃撃事件、秋葉原事件の被告人の死刑執行を受けて、新聞紙上に掲載された記事を参考資料に、「死刑制度」をテーマに報告をしました。意見交換のなかで、拙い報告は豊かな内容に変化し研究会終了とともに、新たな知識と感動をお土産にいただけるという楽しい会です。

一年に一度外部からの講師の特別講演会が企画されます。今年の3月11日、岩波書店の元社長であり雑誌「世界」の編集長をつとめられた岡本厚氏をお招きしました。「私たちはどのような転換点にたっているのか」と題しての講演の中で、社会の様々な分野において進められている「戦争の準備」、それを止める試みとして実施された沖縄と台湾との対話シンポジウムが紹介され、平和運動を構築していく市民の知恵と力を感じました。

暉峻先生の魅力だけでなく、個性豊かな市民との対話は、私にとって心が浄化される貴重な時間となっています。

まもなく日本評論社から研究会の集大成の書籍が発刊されます。

◆これから——

いよいよ、人生の最終章を迎えます。心揺さぶる対話を聞き取る耳を、美しいものを見つけ出す目を、満開の桜を愛でに行き、時には平和を求めるデモにも行く足腰を、なりよりも真理と真実を見極める心と頭を鍛えながら、生き急いで逝ってしまった人々の分まで欲張って楽しい時間を過すつもりです。

(林 敦子・元本部事務局員)

◆針生誠吉基金◆

本誌は、故針生誠吉先生からの多額のご寄付によって、発行を支援していただいております。

(※)この会の詳細については、会の事務局長の佐藤俊廣氏から「法民」2022年6月号に報告させていただいております。